

二〇一五年度

## 三次入学試験問題

【国語】 時間 50分

【校長先生からのメッセージ】

おはようございます。ゆつくり表紙を読みながら、心を静めてください。

まもなく一時間目の「国語」の試験が始まります。

がんばってきた自分を信じ、落ち着いて問題に取り組みましょう。

あなたが、持っているすべての力を出しきることができるよう祈っています。

【注意】 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。

2 問題は14ページまであります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。

3 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

論里が三歳のとき、母は今の父と再婚してその三年後に妹の有里が生まれた。その後、論里が中学二年生になった現在まで家族四人仲良く暮らしていた。しかしある日、母は次のような書き置きを机の上に残し、ひとり旅に出ってしまった。

「いつか」は、いつ来るのか。  
必ず来ることは、信じていました。  
でもそれがいつかはわかりません。  
とって、ただ待つだけでも、つまりません。  
そしたら、いいことを思いつきました。  
こちらから迎えに行けばいいのです。  
「今」を「いつか」に変えればいい。  
というわけで、今日がその「いつか」です。  
みんな、元気でなかよくね。  
では、行ってきます！

翌朝の母からのメールには、「詳しくはWebで」と書いてあり、ブログに美しい写真とともに旅の様子がつづられていた。それを読んだ論里は、あきれてしまうのだった。その後半年間、母は家に戻らなかった。論里は、クラスメイトの水原白と共に学校創立記念行事の「キャンドルナイト」実行委員として活動している。

〈今日から十二月。朝、目が覚めたら一面の銀世界！ 昨夜、一晩じゆう降り続いて、外に出てみたら自転車がすっぽり埋まっています〉

〈降りたての真新しい雪に朝陽あさひがあたりと、濃いすみれ色からばら色に変わって、やがて金色に染まります。雪白というのはなんてきれいな色なのでしょう。この世界は、なんてきれいなんでしょう〉

母さんのブログに、本格的な雪景色の写真がたくさん更新こうしんされていた。やたらと少女趣味しゅみな文章は読んでいて気恥きはずかしかったが、それでも写真はきれいだった。

〈きやあきやあ言いながら写真を撮とっていたら、雪なんてすぐにうんざりするよと近所の人にあきれられました〉

その姿がありありと目に浮うかんだ。近所の人、すみません、と心の中で謝あやまる。ちょっと傍迷惑はためいわくだけど、そういう人なんです。ごめんなさい。

雪の写真を見ていたら、水原白のことを思いだした。水原の生まれた朝、水原のお母さんもやっぱりきやあきやあ言ったのだろうか。言わなかったんだろうな、きっと。

## 【 中 略 】

その朝、テレビから「流星群」という言葉が聞こえてきて、ぼくは急いで音を大きくした。ぼくと有里と父さんの三人で、朝食のパンを食べているときだった。

『——の夜から、ふたご座流星群が見られると……』

「ふたご座？ あのね、ユータはふたご座だって言ってる」

「有里、しっ」

キヤスターの言うことによれば、流星群は一週間近くにわたって見られるらしい。今日あたりから見えはじめ、いちばんよく見えるのは週末の真夜中という話だった。その日は条件がよければ一時間で数十個見られるという。

「そういえば論里、あのキャンドルナイトのほうはどうなったんだ？」

テーブルの向こうから父さんが話しかけてくる。

「うん。……べつに、ふつうにやってる」

「そっか」

<sup>注</sup>あれ以来、ぼくと父さんは互いになんともなくぎくしゃくしてしまっている。話しかけられればふつうに答えるのに、ほんのわずかだけれど小さな段差ができてしまった気がする。

「……ごちそうさま」

ぼくは立ちあがり、コップと皿を流しへ運んだ。

学校に行くと、水原も流星群の話をしていた。

「うちの窓から見えるかな」

そう言って目を輝かせる。くつきりと黒い瞳の横で、白目の部分が積もったばかりの新雪のような色をしていた。まぶしいものを見た気がしてわずかに視線をそらす。そういえば最近、めったに水原の寝ぐせを見ることはなくなった。目の奥に、今見たばかりの白が残っている。

「見えるといいな」

ぼくはそう言うと、ぎこちなく窓の外へ目を向けた。

カラカラとベランダを開けて外へ出る。きんと冷たい空気が頬を刺した。パジャマの上からしっかり上着を着こんであるが、それでも寒い。

夜空を見上げると、闇が街の明かりで薄まって、どこかぼんやりと頼りなく見えた。八時か九時くらいから見えはじめるという話だったが、これではとても無理かもしれない。

そのとき、空の正面に、見覚えのある形が浮かんでいるのに気づいた。きれいに等間隔に並んだ、三つの星。

「——あ」

オリオン座だった。

うっかりしていた。この夏から、凶面ではあれだけなんども目にしていたのに。キャンドルばかりに目がいつて、実際の空は見ていなかった。

いつの間にか季節が巡って、本物のオリオン座が天の中央に姿を現していた。

「ほんものだ……」

ぎゅつと目を細めて星を探す。星座表はすっかり頭に入っていた。オリオンの胴体を作る星はどうか見えたが、ふりあげた腕の部分は見えない。

「ええと、あれがベテルギウスだとすると、こっちがシリウスで、……あ、あれがプロキオンかな？」

すごい。冬の大三角だ。どの星も一等星で、空の中でもひとときわかるく、じつと見ているときどきちかちかかと瞬いている気がする。続けて冬のダイヤモンドも見つけだそうとしたが、ベランダの庇にじまされて見えなかった。そのころにはすっかり体が冷えきってしまい、ぼくは震えながら部屋に戻った。

「うわ、びっくりした。外にいたのか？」

父さんが缶ビールを手にして立っていた。

「うん、ちよつとね」

ぼくがリビングを出ていこうとすると、ふいに後ろから声がかかった。

「論里。流星群、見に行ってみようか？」

その週末の夜、ぼくと有里は父さんの車に乗って、街の高台を目指した。深夜近くに出発したので、有里はすでにシートでうとうとしている。十分ほどで緑地公園に着いた。広い駐車場から、街と空が見渡せる。

表に出て空を見上げた。吐く息が白い。

周囲を木立が覆い、家の近所ほど明かりが多くないせいか、いつもよりはつきり星が見える。ぼくはまずオリオン座を探した。けれどどこどころに薄く雲がかかってうまく見つけられなかった。

星を探している間も、じつとしていられないくらい寒い。ぼくが足踏みをしていると、父さんが魔法瓶から紅茶を注いで手渡してくれた。紙のカップからもうもうと湯気が上がり、舌をやけどしそうに熱い。有里はふうふう言いながら甘い紅茶を飲み終

わると、「星が降ってきたら教えて」と言っで車に戻ってしまった。

ぼくと父さんは駐車場に立ち、言葉を交わすこともなく空を見上げている。星はまだ降ってこない。

ふいに父さんが口を開いた。

「母さんのところからは、もつとたくさん見えるんだろな」

「……うん」

「母さんも今ごろ、見てるかな、カメラ持って」

「……………」

父さんの声は穏やかで優しかった。考えてみれば、いつもずっと変わらずそうだった。わかっでいて、ぼくは気づこうとしなかった。

ぼくが口を開こうとしたとき、

「ごめん、て言う気なら、いらなからな」

と先に言われた。父さんは紅茶を飲み干し、カップ代わりに使っていた魔法瓶の蓋のしずくを切ると、カパリと本体へ戻した。

「じつは父さんのほうが謝ることがある。……この間、母さんに会いに行った」

ぼくはぎよつとして父さんを見た。① ひどくばつの悪げな顔をしている。

「うそ。いつ？」

「先々週、かな。母さん、元気そうだった」

ぼくは口をばくばくさせるだけで、言葉が出てこない。

「そろそろ帰ってこないか、って言ったら、本当はそのつもりだったけど、お世話になった土産物屋の奥さんが雪で滑って骨を折ってしまった、まだ帰るに帰れない、って。母さん、エプロンして店番してた。店の奥さんにも会ったよ。いい人だった」

ぼくたちに内緒で行ったので、その日のうちに家に帰るためそれ以上長居はできなかつたのだという。父さんは、そこで少し表情を改めた。

「——論里。これから言うことは、おまえにだけ話す。有里には言わないつもりだ。言っておくけど、それは有里がまだ小さいからで、今の論里くらいの歳だったらちゃんと話すはずだ。そこはわかるな？」

黙<sup>だま</sup>ってうなずくと、父さんは話しはじめた。ぼくの知らない話だった。

「この前、訪ねていったとき、ようやく聞かせてくれたんだけど。じつは母さん、去年の健康診断<sup>しんだん</sup>でちよっと気になるところがあったらしいんだ」

「えっ」

「あ、待て。先に言っとく。再検査の結果、結局、問題はなかったそうさ。ただ……」

もしそれが本当だった場合、この先かなりたいへんだっただろう、という話だった。だから、母さんもいつときは覚悟<sup>かくご</sup>していたのだそうさ。

②

足もとがぐらりと揺れた気がした。話の内容が、うまくのみこめない。再検査？ 覚悟？ そんなの、現実<sup>げんじつ</sup>に使う言葉<sup>ことば</sup>じゃない。なにより、あの母さんとは結びつかない。

「ごめん、驚<sup>おどろ</sup>くよな、こんな話」

父さんはぼくが少し落ち着くのを待って、再び話しはじめた。

「そういえば、一時期ぼうつとしてること多かっただろう？ 仕事辞<sup>や</sup>めたせいかと思ってたら、ひとりで悩<sup>なや</sup>んでたんだろ？」  
ぼくにあれこれ口やかましく言っていたころだ。

「情けない話<sup>じやうたなし</sup>なんだけど、そういえば後から、思いあたる<sup>おもひあたる</sup>ことがぼろぼろ出てきてさ。……一度、言われたことあったんだよなあ、冗談<sup>じやうたん</sup>ぼく。もしわたしがいなくなっても、ちゃんと子どもたちのめんどう見られる？ って。父さんそのとき、DVD観<sup>み</sup>てたから適当<sup>ていとう</sup>に聞きながしてしまっただけだ」

「だめじゃん」

ぼくが言うと、父さんは小さく笑って「ごめん」と言った。

「だから、最初母さんがいなくなったとき、これか、って思ったんだよ。試<sup>ため</sup>されてるのかな、って。まあ、あたらずとも遠<sup>とほ</sup>からず、だったんだけど」

父さんの穏やかな顔を見ていたら、少しほっとした。母さんは、本当に大丈夫<sup>だいじやうぶ</sup>みたいだ。

「あともうひとつ、……おまえの实のお父さんに会いに行ったのかも、とも思った」

どきりとする。

「けんかしたんだって？　母さんと。後悔こうかいしてたよ、ちゃんと考えててやらなかったツケが来た、って。すごいしゅんとしちゃってさ、あの母さんが。これはまだいなくなる前の話だけど」

ぼくはじつと黙っていた。そこで、父さんが思い切ったように口を開く。

「会いに行ってもいいよ、お父さんに。論里がそうしたいなら」

「え、いいの？」

「そりゃそうだよ、あたりまえだろ」

「……でも、嫌いやじゃない？」

父さんは一瞬いっしゆん、押し黙おしまってから言った。

「嫌いやじゃない。……っていうのはうそで、ほんとはあんまり嬉うれしくない。だって、もし向こうのお父さんのほうが格好よかったり、お金持ちだったり、足長かったり背高かったり……」

ぼくが笑うと、父さんも笑った。

「でも、おまえが父さんに気兼きがねして我慢がまんするほうが、もっと嫌だ」

ポケットに両手を突つっこみながら言う。

「……住所も名前も、知りたくなったらいつでも教えるから」

ぼくはなんと返事をしていいかわからず、ただ口をつぐむ。いろんなことを一度に聞かされて、頭が混乱こんらんしていた。父さんも、母さんも、ずるい。急にぼくの知らないことばかり話します。なんだか、自分がひどく小さな子どものように思えた。

ぼくがうつむいたまま黙もりこんでいると、父さんはそつと車のほうへ歩いていった。有里は車の中で眠ねむってしまったようだ。あたりはしんと静まりかえっている。

ゆつくりと息をするたび目の前が白く煙けむる。自分の爪先つまずきがやけに遠くに見えた。

隠かくし事ことをするのは、いつも自分のほうだと思っていた。けれどももしかしたら、そうじゃなかったのかもしれない。③ 鼻はなの奥おくが

つんとして、慌あわてて息を吸いこむ。



ぼくは、流れ星を探すふりをして空を見上げた。

そのとき、ふいに世界がぐん、と広さを増した。

思わず息をのむ。いつの間にか雲が晴れ、頭上にどこまでも丸い星空が広がっている。

真つ先にオリオン座が目飛びこんできた。この夏から、紙の上に、そしてグラウンドに、なんども描いてきた星座だ。目印となる三ツ星が、中央にきれいに並んでいる。

「——ねえ、オリオン座を作る星の中で、地球からいちばん遠い距離にあるのはどれだと思う？」前に電話で話したときの水原の声がよみがえる。「答えはね、あのなかよく並んだ三ツ星の、真ん中の星なんだって。意外でしょ？」

その三ツ星の左上にあるのが、一等星のベテルギウスだ。水原によれば、どれよりも赤く輝くこの星は、じつはすでにその晩年を迎えているのだという。地球までの距離は、約六百四十光年。もしかしたら今見ているこの光は、もうあの場所には存在していないのかもしれない。星ですらも、いつかは消えてしまうのだ。

——「いつか」は、いつ来るのか。必ず来ることは、信じていました。

オリオンの左足にあたるのが青く光るリゲル。そこからひとつずつ星をつないでいく。おおいぬ座のシリウス。こいぬ座のプロキオン。ふたご座のポルクス……。

——といって、ただ待つだけでも、つまりません。

三つつなげれば大三角。六つつなげれば、空に巨大なダイヤモンドが浮かびあがる。

今さらのように気づく。でたらめにつないでいるように見える星座だが、星がなければ、それさえもできないのだ。

——人は生まれるときも、そしてこの世を去るときも。

広い宇宙にぼつりぼつりと孤独こどくに浮かぶ、距離も大きさもばらばらの星々を、ぼくたちは地上からつなげて神話を作る。とたんに星座は姿を持って、天の高みに輝きだす。

ふいに父さんが声をあげた。

「あつ、今、流れた」

「え、どこ」

「あそこ。あつ、また」

ぼくは父さんの指さすほうをおろおろと見回すけれど、ひとつも見えなかった。

「……論里。おまえひよつとして、視力落ちてないか？」

父さんに聞かれ、ぼくはそこでようやく白状することにした。

「うん、じつは……」

思い切って話してみたら、なんで早く言わなかったんだ、と父さんはあきれた顔をした。

冬休みになったら、真っ先に眼鏡を作りに行くことになった。

家に着いたときは夜中の三時だった。有里と父さんはすぐに布団ふとんに直行する。けれどぼくは、とても眠れそうになかった。誰もいなくなったリビングで、母さんのブログを開いた。

記事のいちばん下にあるコメント欄らんにたどりつく。もちろん、これまで一度も書きこんだことはない。言いたいことはたくさんあった。電話越こしだと、きつとどれひとつ言えないだろう。だから、ここに書くことにした。ただし、ここに書いたことは世界中の人の目に触ふれる。だから、考えに考えて、これだけを書いた。

④ ぼくも、この世界はきれいだと思う。見られてよかった。——(注2) Lonely

送信ボタンを押した後、急に恥ずかしくなって、急いで自分の部屋に戻り布団にもぐりこんだ。書きこんだコメントは、二日間だけそのままにして、それから自分の手で削除した。

(市川朔久子『紙コップのオリオン』)

(注1) あれ以来……母の不在が原因で、父とささいな言い争いをしてしまったことを指している。

(注2) Lonely……ひとりぼっち、という意味。論里の名前は、「人は生まれる時も死ぬ時もひとり」という母の考えからつけられ、友人からもロンリー(Lonely)と呼ばれている。

問一 —— 線部①「ひどくばつの悪げな顔をしている」とありますが、この時の父さんの気持ちを、その理由もふくめて説明しなさい。

問二 —— 線部②「足もとがぐらりと揺れた気がした」とありますが、この時の論里の気持ちを、その理由もふくめて説明しなさい。

問三 —— 線部③「鼻の奥がつんとして、慌てて息を吸いこむ」とありますが、この時の論里の気持ちを、その理由もふくめて説明しなさい。

問四 —— 線部④「ぼくも、この世界はきれいだと思う。見られてよかった」とありますが、この言葉には論里の、母に対するどのような思いがこめられていると考えられますか。【中略】より前の母に対する気持ちからの変化もふくめて説明しなさい。

## 二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

現在、自然エネルギーを生かす方法としてすぐれたおもしろいアイデアが生まれつつあります。しかし多くの箇所かしよで問題となっているのは、どんなによいアイデアで試みようとしても、地域の住民が積極的に受け入れてくれることが少ないという悩みなやです。一部の行政の人たちや技術者などの間に、地域住民は保守的・閉鎖的へいさで頑迷がんめいだ、とみなす風潮があります。それは大きな間違まちがいでは、そもそも地域社会というものはたんなる空間ではなくて、そこに歴史と文化があるのです。その本質を一言でいえば、地域には「作法注2がある」ということです。

このことを説明するには、地域社会の積極性・開放性について述べる必要があります。前の節で地域社会はもともとエネルギーで独立していたと言いました。原則的にはそうですが、しかしながら地域社会はエネルギーひとつとつとつてみても、<sup>①</sup>厳密には閉じることが不可能でした。

燃料を例にとれば、それは都市の成立と関連があります。歴史的な都市、江戸えどがイメージしやすいでしょう。江戸の人口は正確には分からないのですが、およそ一〇〇万人であったと推計されています。もちろん、江戸時代にはガスも電気もありません。もしこの一〇〇万人の朝食の用意のために薪まきをくべたら、たった一日の朝食だけでもたいへんな量の薪が消費されることに気づくでしょう。私は茨城県いばらきけんの霞ヶ浦かすみうらに面するある農村の、江戸時代から明治にかけての物資の収支を調べたことがあります。その村から江戸に膨大な量の薪が船で運ばれていました。その時代、村の山は薪を生産するという意味で、「金の山」とも言えたのです。薪というエネルギーを輸送するのは、もちろん送電線ではありません。山の中は人、山から霞ヶ浦の河岸かしまでは馬、霞ヶ浦から江戸までは船というルートで運ばれました。

その村の明治六（一八七三）年の史料によると、薪が年間二万束生産されています。もちろん、村から出されるのは、薪だけではありません。この明治六年の史料には他の生産物として、米七二〇石こく、大麦三〇〇石、小麦九石、菜種三石、大豆一七石、あずき三石、粟一三石、稗三三石、清酒六〇〇石が記載きざいされています。不明ですが、このうちかなりの量の物資が村の外へ出されたものと推察ひえされます。

このように燃料エネルギーを典型として、さまざまな物資の出入りがかなりありました。それに加えて、人間の出入りがあり

ましたが、私は次のことを紹介しておきたいのです。日本のほとんどの村ではこんな伝統がありました。それは噂うわさであれ、新しい珍しい試めづみかどこかであると聞けば、村人五〜六人がそこに出かけて行って、そのアイデアを学んで帰ってくるのです。例えば、上総掘りの井戸いど（縦に深く掘る井戸）がある村で採用されたという噂を聞くと、村の費用を使ってそこに数人で出かけていくわけです。民俗学者の宮本常一みやもと じょういちによると、数人で出かけていくのは、たんに本来の目的だけではなくて、その行く途とちゆう中の道々、例えば興味をひく稲の品種があることが分かるとみんなで品定めをしてある判断をするというような、いわば道草が、新しいアイデアを得る手段だったのだそうです。村から数人でお参りに行くお伊勢講いせこうは有名ですが、このお伊勢講もたんに伊勢神宮いせんぐうにお参りに行くという目的以外に、道中さまざまなことを学び習得をする旅でもあったのです。

そうすると、保守的・閉鎖的、頑迷という用語は似つかわしくないわけです。では、なにがそのように見えさせるのでしょうか。それは判断主体としての村コミュニティの結束が我が国ではたいへん強いことが理由です。この伝統は現在もつづいていて、とりわけ地域自治会の力は、新興住宅地、マンションなど弱いところもあるものの、一般的にはたいへん強大です。地域でよく活動しているNPOなどはこのあたりを心得ています。

例えば、あるNPOが近くの小川で子どもたちと環境学習かんげいがくをする活動を企画した場合、地元自治会との共催きゆういという形をとります。実際は、その活動のほとんどすべてをNPOがするとしても、です。この事実を見て、自治会はなんの活動もしないのに共催とは権威けんい的だという人もいますが、それはうわべの理解です。万一ある住民が苦情を言ってきたときに、NPOに代わって前面に出るのはこの自治会なのです。行政、隣接りんせつの地域に対しても自治会は処理能力をもっています。他方、NPOはそのリーダーはりっぱな人が少なくないのですが、地元との関係性が弱いので処理能力が劣おとります。地域には広い意味のローカル・ルール(注3)があり、このローカル・ルールが人々の生活の保全に役立っています。このローカル・ルールを心得て、動くことを「作法」と言っているのです。

地元の作法を心得ていないもつとも悪い例は、行政（地方自治体）の特定部局と話し合って、その部局が話に乗ったので、ある企画を実行するというものです。実際にこの乱暴な実行方法が現在も行われていることが少なくなく、私は「また行政が好きなのをやっている」という反感の気持ちをもったコメントを地元から聞くことがよくあります。ある日突然とつぜんに、湖の近くで工事が始まり、例えば、ビオトープの公園をつくることになってそれが完成します。しかしそのような公園ができあがっても地元の人たちはその公園に足を運びませんし、その保全をしません。行政は公園をつくるときの当年度予算はそれなりにつけますが、

その後の保全に対しては熱意がなくなるのがふつうです。同じように作法を心得ていないのは、行政の支援しえんの元に一度だけ地元  
に説明会をするもので、これも作法からほど遠いものです。総じて、この種の「地元の作法」<sup>③</sup>を知らないことによって、相手  
が閉鎖的であるとか頑迷であると言っているにすぎません。

地域によって異なりますが、どこに申し出てどのようにすれば地元の作法に沿って作業を進めていけるのか、その仕方はすぐ  
に分かります。とりあえずは当該自治体のコミュニティ課あたりに聞くことから始めるのが便利かもしれません。ともあれ、地  
元は外部からの新しい知恵ちえを受け入れることに思っているほど消極的ではないことを言っておきたいと思います。

（鳥越皓之『地域力で自然エネルギー！』）

（注1）頑迷……がんで自分の言うことだけが正しいと信じ、人の言葉を受け入れないようす。

（注2）作法……ものごとを行う方法、やりかた。しきたり。

（注3）ローカル・ルール……ある地域にだけ通じるきまり。

問一 —— 線部① 「厳密には閉じることが不可能でした」とはどのようなことですか、説明しなさい。

問二 —— 線部② 「保守的・閉鎖的、頑迷という用語は似つかわしくないわけです」とありますが、それはなぜですか、説明し  
なさい。

問三 —— 線部③ 「地元の作法」とありますが、「地元の作法」にしたがって公園をつくる場合、どのようにしたらよいですか。  
筆者の提示している手順に沿って、説明しなさい。

三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 船は北西にシンロをとった。
- (2) 敵にホウフクする。
- (3) 友子さんはカセツのステージで歌う。
- (4) その国は造船業をキカン産業としている。
- (5) 詩のキシヨウ転結を考える。







三次入学試験 国語 解答用紙

受験番号

氏名

得点

この中には何も書かないこと

問一

--	--

問二

--	--	--

問三

--	--	--	--

問四

--	--	--

問一

--	--	--

問二

--	--	--	--

問三

--	--	--	--

問四

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

⑧

⑦

⑥

⑤

④

③

②

①